

# 第一回星野立子新人賞

拔井諒一

手袋の白き敬礼初列車  
二日はや猫の出掛けてをりにけり  
立春を口実に酌む昼の酒  
薄氷の下に漣生まれけり  
紅梅の花に露な紅き脈  
春水の通りたる跡光りけり  
さざ波の丸みを帯びて水温む  
春の昼足並みのふと揃ひをり  
春宵や履きたる下駄の女物  
梢から解けてゆきぬ春の雲  
影に入る落花の白くなりけり  
一面の落花の隙間また落花  
さやさやと葉のそよぐとき風光る  
白々と闇を遠ざけ雪柳  
来し人の小さき挨拶五月来ぬ  
温泉にすつかり飽きて子供の日  
留まれる雨に新緑ありにけり  
日の匂い夜風に残り夏めける  
姫女苑休耕田とも空き地とも  
鉄線花吾より若き人の妻  
蛍の鼓動光つてをりにけり  
太陽の光に濡れてゐる青葉  
水の上で取っ組み合へる水馬  
浮上して濡れてをらざる夏の鴨  
なめらかな風を捉へし川蜻蛉

日輪の中へ夏蝶見失ふ  
黙したる時に麦酒の苦くなる  
押鮭や列車は京を出たところ  
つんと酔が鼻を突くなり夏料理  
滝壺にある水の影虹の影  
大地から鉄塔生ゆる大西日  
改札に捕まつてゐる浴衣かな  
舟遊び向かうの船も舟遊び  
蓮の葉の零れたき水揺れてをり  
開きたる花火に音の間に合はず  
花火などなかつたやうな夜空かな  
蛍光灯それぞれ色の違ふ秋  
秋ともし傷ひとつ無きゆでたまご  
座る時とるその距離も秋の夜  
進んでも進んでもまだ虫の闇  
秋日傘波打際にしやがみたる  
彼岸花咲いて故郷らしくなり  
ゴーグルをかけて秋刀魚を焼いてをり  
蚯蚓鳴く埴輪の目には深き闇  
耳の奥痒みありけりやや寒し  
団栗の帽子ばかりが落ちてをり  
雲青くなり寒夕焼赤くなり  
子供には子供の音の落葉かな  
青空に枝投げ出してゐる枯木  
日陰れば寒禽の声鋭角に